

## 〈卒業生短信〉

### ぼくと日本語

モハメド・オマル・アブディン

日本語学習者にはさまざまな背景をもった者がいる。中国、韓国、台湾などの漢字文化圏出身者の場合は、比較的日本語学習は容易である。しかし、非漢字圏出身者にとって、日本語学習はさまざまな面でハードルが高いとぼくは思う。特に、同じ音が複数の意味を指すいわゆる「同音異義語」というのが、日本語の最大の混乱要因だ。どういうことだろう？ 例えば「はし」という音は、「橋」、「端」、「箸」などなど複数の意味がある。「橋の端に、箸のような鋭い嘴をした鷹が一羽いました」を「はしのはしに、はしのようなすどいくちばしをした鷹が一羽いました」と書けば、漢字に明るくない人にとっては謎としか思えなくなる。このように非漢字圏出身者は、漢字に奔走しながら日本語を学ぶのである。

といっても、学習者一人ひとりがただ苦しまぎれに日本語を勉強しているわけではない。いろいろな工夫をこらして、日本語をわが物にしようとしているのだ。ここで、ぼくがどのようにして日本語を勉強してきたかについて書いてみたいと思う。

ぼくは、1998年にアフリカのスーダンから初来日した。母語はアラビア語である。日本語を学ぶという意味において、一般的な学習者と2つの点で大きな違いがある。一つ目の違いは、ぼくは視覚障害者であり、文字の読み書きができないことだ。二つ目の点は、ぼくは、来日2か月後に「鍼灸」の勉強を始めなくてはならず、そのため、来日2週間後から「鍼灸あんま過程」に進学するための受験をしなくてはならないことだった。一般的留學生の場合、ある程度の日本語学習歴があったうえで、大学および専門課程に進むことになるが、スーダンでたったの1か月しか日本語学習歴のなかったぼくは、完全なる場違いな人間だった。

大方の心配をよそに、ぼくは根拠もなく楽観的であった。なぜかという、来日した当時、ぼくは、日本語にひらがな、カタカナ、漢字という3通りの文字が存在することすら知らなかったからだ。「知らぬが仏」とはこういうことをいうのだろう。

ぼくは点字を通して日本語を勉強しはじめたのだ。点字は50音を表すことができるが、漢字などの表記はできない。オールひらがなだと思ってもらえるとわかりやすいかもしれない。

来日してからぼくは鍼灸マッサージ過程のある盲学校の受験先を探すことになる。日本語もままならない目の見えない外国人に東洋医学などを教えるのは困難だという理由で、受験する以前に、次々と門前払いを食らった。それはそうだろう。受験を許可してもらっても、何を聞かれているのかすらわからず、撃沈されることが続いた。その見事な負けっぷりはハルウララに引けを取らないものであった。

そうこうしているうちに、ぼくを哀れにおもった福井県立盲学校の教員が働きかけてくれて、ぼくは福井県立盲学校に受け入れてもらえることになった。

そのころ、ぼくの日本語学習歴は3か月を超えていた。東京に2か月ほど滞在している間にすこしずつ簡単な会話はできるようになっていったが、試練はそこからだった。

福井県立盲学校では、寮の相部屋に住みながら、毎日学校へ通うことになっていたが、学校では、福井弁による東洋医学の授業、寮では、先輩や同期の、福井の中でもいろいろな地域からやってきた微妙な方言の違いに苦しんだ。

文化の違いの壁も当然ながら大きかったが、なんといっても、言語を習得するのにぼくは全身全霊をかけて臨んだのだ。ジェスチャーやボディラングエッジは見れないし、他の視覚情報にも頼れないぼくは、耳からの情報を頼りに東洋医学、福井弁、いわゆる標準語を聞き分け、そこから情報をゲットする作業に没頭した。継続はほんとうに力なりと、ぼくはしばらくたってから思った。いつのことだったかははっきり覚えていないが、ぼくは初対面の相手が福井のどの地方出身者であるかを、一言二言聞いてだけで当てられるようになったのだ。白杖を持った、それも福井の町ではめったに出くわすことのない黒人に、一発で出身地を当てられた人はショックだったことだろう。相手の反応を心の中でにやにやしながら見届けるのがささやかな楽しみとなった時、「ぼくってほんとうにいやなやつだな」と自身の性格の悪さを再認識した。

日本語を覚えるのに、ぼくにとって強い味方があった。それはラジオだ。スーダンにいたときからぼくは一日中ラジオをつけていた。ラジオの情報は、相手が見ていないことを想定しているので、視覚障害者にとってわかりやすく楽しく聞くことができるのだ。

しかし、日本にはたくさんのチャンネルがあるので、最初は何を聞けばよいかわからず、先生に聞いたところ、NHKを聞けば正しい日本語が学べますよ、といわれ、しばらくNHKを聞くことにした。歌謡番組で細川たかしの東京ジョンガラを聞けば、「今はこの曲がはやっているのだろう」などと勘違いすることは日常茶飯事だった。NHKを聞き飽きたころ、ぼくはほかのチャンネルも聞き始めた。そこで、ぼくはすばらしい日本語学習ツールに出会った。それは、民放のプロ野球放送である。民放のプロ野球放送のアナウンサーは基本的に、起きていることをただ描写するだけでなく、聴取者の関心を高めるべく、平凡なフライをあたかもホームランになるかのようにを大げさに伝えたり、すきさえあらばおやじギャグを挟み込んだりと、聞き手を飽きさせない工夫をこらすのである。たまたま、日本に来てから野球に関心を持ち始めた僕にとって、プロ野球放送を聞くことは日課と化していった。ちなみに、ぼくが応援しているのは広島東洋カープだ。ここ何年か、若い女性を中心に人気上昇しているカープではなく、全く人気もなく、優勝どころかAクラスになる兆しもない弱い暗黒時代の広島カープである。しかし、好きになる理由なんてだれだってそう明確にわかるものではないし、「鯉」に落ちてしまったら、抜け出すことはなかなか簡単なことではあるまい。

ラジオ以外に、日本語を楽しく学ぶ重要な秘密兵器があった。それは「おやじギャグ」と揶揄されがちなダジャレである。福井に滞在していた間、週末は市内のホストファミリーとともに過ごさせていただいた。学校教員のお父さん、盲学校職員のお母さん、そして、私より二つ年下の高校2年生の弟、中学生の弟の家族構成だが、思春期の二人息子は、ほぼリビングにあらわれなかったり、食事の時間になると、自分の分をたいらげるやいなや、すぐに自室に引き上げるのだが、ゲストの私はお父さんの話に耳を傾けざるをえない空気が流れていた。無抵抗のぼくに対して、お父さんは、決してレベルが高いといえないダジャレを連発してきた。しかし、まだ日本語が上達していなかったぼくにとっては、レベルが低く、わかりやすいダジャレのほうがむしろ理解しやすかったので思わず爆笑。すると、お父さんは調子にのってこれでもかと次々、さほど奥深くない引き出しからネタを取り出し続けてくるのだった。

そのおかげで、ぼくは飛躍的に日本語を理解できるようになった。と同時に、場や相手を選ばずおやじギャグを多用するようになり、それはのちに、周囲の友人が激減する結果を招いたが、時すでに遅しだった。

ダジャレは、いわゆる同音異義語をベースに言葉遊びをする、日本語学習最強の学習ツールだろうとぼくは考えている。ダジャレを軽蔑したり、スルーしたりする人は、たいていうまくダジャレのいえない人たちだろうと自身の乏しい経験を通して思う。

非漢字文化圏出身であり、活字の読めない視覚障害者のぼくにとっては、ダジャレは日本語を、とりわけ漢字を学ぶのに大いに役立ったので、日本語教授法にダジャレを大いに活用すべきだろうと思う。もしそれについて要請があればいつでも協力するつもりでいる。その場合、教授待遇でなくてはお断りだけだね。

東京外国語大学の日本過程に入学してから、ぼくはそれまでのけっして体系的とはいえなかった日本語学習方法を振り返ることになる。もしも最初から日本語学校で日本語を学べば、もっともっと正確な日本語を話せるようになったかもしれない。しかし、福井県で東洋医学という専門的で特殊な裏口から日本語世界に飛び込むことができたからこそ、表口からは絶対に覗き込むことのできない日本語の面白さに出会えたのだ。これからも「盲点」からしか発見できない日本語世界を堪能していきたい。時々、みなさんにもその幸せな空間をおすすめ分けますね。